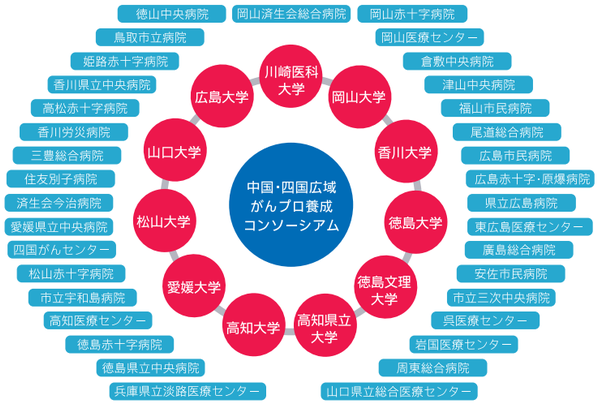
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

中国・四国地域に位置する11大学がコンソーシアムを形成し、各大学院に多職種のがん専門医療人養成のためのコースワークを整備し、これに地域の35のがん診療連携拠点病院が連携することにより、広い地域にムラなくがん専門医療人を送り出すことを目的としています。



中国・四国全域に広がる拠点病院
組織的・効率的ながん治療の均てん化の実行組織
：コンソーシアム参加がん診療連携拠点病院

コンソーシアム参加がん診療連携拠点病院
参加大学・がんセンター

【お問い合せ】
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム事務局
〒700-8558　岡山市北区鹿田町2-5-1（岡山大学 医学部内）
TEL：086-235-7023　FAX：086-235-7552
Eメール：info@chushi.ganpro.jp
http://www.chushiganpro.jp/

中四がんプロ　検索

セミナー・市民公開講座の開催情報や
活動報告などホームページで随時更新中

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

市民公開講座

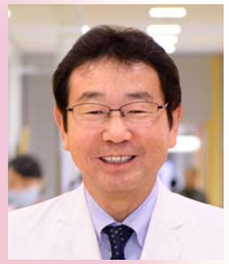
2018
3月25日（日）

時間：13:00～15:25　開場12:30
場所：三木記念ホール（岡山県医師会館内）
岡山県岡山市北区駅元町19番2号

最新・最適ながん治療
～がん治療はこんなに多様化しています～

ご挨拶

岡山大学病院　病院長／岡山大学病院　放射線科　教授　金澤　右



一般に「がんは怖い病気」と思われています。しかし、時代の進歩とともに、「がんは必ずしも怖い病気ではない」ともいえるようになったと私は思っています。

私は、今から30数年前に愛知県がんセンター病院の研修医でした。そのころ、「70歳以上の患者さんのがんの手術は危険性を伴うからしないほうが良い」とか、「二重がんの患者さんはめずらしい」などとがんセンター内でも言われていました。しかし、それは過去のことです。現在は、70歳以上の患者さんのがんの手術は普通に行われますし、また、一生にいくつものがんにかかる人も多数存在します。つまり、がんの治療は確実に進歩しており、また、人々も長命になったということだと思います。

治療の進歩は、手術だけでなく、より低侵襲な治療を患者さんに提供するようになりました。今回お話に上がる「凍結治療」や「陽子線治療」はそれにあたります。また、珍しいメラノーマや子供さんのがんもその治療成績は急速に進歩しています。

本講座を通じて、皆さんが多様化したがん治療の中から、最新・最適ながん治療の知識を得られますことを願っております。

主催：中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム
共催：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科放射線医学・陽子線治療学、津山中央病院
後援：岡山大学病院メラノーマセンター・小児医療センター、岡山県、岡山市、岡山県医師会、がん診療連携協議会、岡山商工会議所、山陽新聞社、RSK

本日のプログラム・講演内容

開会挨拶　13:00～13:05　岡山大学病院　放射線科　准教授　平木 隆夫

講演1　13:05～13:35

腎がんを切らずに凍らせて治療する～腎凍結治療～

岡山大学病院　放射線科　准教授　平木 隆夫

本日は岡山大学病院放射線科で行われている腎凍結治療についてお話しします。凍結治療とは、その名の通り腎がんを凍らせて死滅させる治療です。手術と違い体を切ることなく、がんに数本の針を刺入するだけで治療が可能です。よって、患者さんの体にやさしく、腎機能への影響も少ない治療です。また、熟練した医師がCT画像を見ながら非常に正確に針を刺入しますので、治療後にがんが再発することは稀です。岡山大学病院では年間80件以上の腎凍結治療を行なっており、日本で最も多くこの治療を行なっています。高齢や腎機能低下などで手術が受けることができない患者さんでも、腎がんの治療をあきらめることなく、治癒できる可能性があります。

講演2　13:35～14:05

メラノーマ（ほくろのがん）の最新の診断と治療

岡山大学病院　皮膚科　講師　山崎　修

メラノーマは皮膚がんの一種で色素をつくる細胞のがん化したものです。手足、爪、顔、体の皮膚の様々な部位にできます。また、眼、鼻、口の中など粘膜にできることもあります。日本では10万人に1～2人と非常にまれです。診断は臨床所見やダーモスコピー（拡大鏡）で行います。予後の悪い皮膚がんですが、早期発見が大切です。普通のほくろやしみから見分けるポイントは、A：形が左右非対称、B：不規則な形、C：多彩な色調、D：大型の病変（6mm以上）です。進行の程度によって治療方針や予後が変わりますので、病期を決定することが重要です。早期では手術が中心ですが、進行期でも分子標的薬やがん免疫療法（免疫チェックポイント阻害薬）などの新しい薬物療法が登場しています。診断や治療の最新情報をお話しします。

休憩　14:05～14:20

講演3　14:20～14:50

小児・AYA世代のがん治療の最近の進歩

岡山大学病院　小児血液・腫瘍科　准教授　嶋田　明

小児がんは年間2,500名前後と希少であり、小児の死因の上位を占めていますが、近年その治療成績の著しい向上がみられています。最も多いとされる急性リンパ性白血病の治療成績も、最も治りやすい群は生存率が90％を超える一方、治りにくい群は、50-60％台にとどまっています。治りやすい群には晩期障害の軽減が望まれ、治りにくい群に関しては遺伝子診断を含めた高度診断技術、造血幹細胞移植や新規薬剤の導入を含めたさらなる治療技術の高度化が望まれます。さらに神経芽腫の進展例や、脳腫瘍などの難治性固形腫瘍は未だ満足のいく成績ではなく、さらなる治療成績の向上が望まれています。

一方AYA世代は15-30歳前後（欧米では15-39歳の定義もある）をさし、高校生、大学生、若年成人を指す言葉です。AYA世代のがん患者も年間5,000名前後と、成人がんの数十万人と比較して非常に希少です。小児に多いがん（白血病、脳腫瘍、骨軟部腫瘍など）と成人に多いがん（胃がん、大腸がん、肺がん、乳がんなど）が混在してみられます。5年生存率が、他の世代に比べて低く、最適で効果の高い治療方針は十分に確立していると言えません。また就学、就職、結婚、出産などのライフイベントが集中する時期におこるため、社会的問題も多くあります。また社会的支援が乏しいなど様々な問題を抱えており、今後国の本格的な取り組みも始まり、治療成績の向上が期待されます。

講演4　14:50～15:20

ここまでできる！ がん陽子線治療

津山中央病院　放射線科　医長　脇　隆博

昨今、新しいがん治療法の研究が盛んに行われており、中でも注目されているものの1つが陽子線治療です。従来の放射線治療（X線治療）と比べて病変に強い放射線を当てながら、周囲の正常臓器への被ばくを少なくすることが出来ることが特徴です。

当院のがん陽子線治療センターは中国四国地域では初となる陽子線治療施設として、平成28年7月に先進医療実施施設として認可を受け、これまでに約180症例の治療を行っています。対象領域は、肝・肺・前立腺・胆管・膵・食道、脳などで、なかでも肝・肺・前立腺が多い状況です。平成30年4月からは、これまでの小児がんに加えて、前立腺がん・頭頸部がん（一部）・骨軟部がん（一部）に対する治療が新たに保険収載され、公的医療保険を用いて治療が受けることが出来るようになります。

本日は、実際に治療した症例を交えながら、陽子線治療の概要から今後の展望までをお話し致します。

閉会挨拶　15:20～15:25　岡山大学病院　病院長／岡山大学病院　放射線科　教授　金澤　右